夢 通信

平成29年 3月号
夢をつなぐ 心をつなぐ 世界をむすぶ
きぬがわ せいさ こうぎょう
衣川製鎖工業株式会社

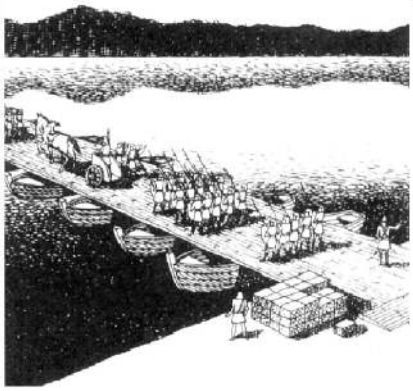
日刊 産業新聞
2017年（平成29年） 3月6日 月曜日
日刊 産業新聞

鉄のふしぎ？博物館 ■54

『ナポレオンの舟橋』

衣川製鎖工業・衣川良介社長

先月は九頭竜川の舟橋を書きましたが、洋の東西を問わず古代から近世に至るまで舟橋は作られました。特に軍用道路の延長線として大量の兵器や兵隊を短時間に運ぶ仮設橋として架られたのです。



①ナポレオンの舟橋

紀元前493年ペルシャ王、ダリウスI世は幅1キロメートルのボスフォラス海峡に舟橋を架け、数10万の軍隊を渡したと言われています。

ナポレオンは1809年オーストリアのウィーンを占領した後、ドナウ川の対岸にいるカール大公と決戦しました。しかしドナウ川の渡河ができず一敗地にまみれました。ナポレオンは直ちに反撃を開始、ドナウ川の渡河が何より重要と判断し、ウィーン兵器廠にあったスレーマン大帝（1494年―1566年）がブタを攻撃した時、ドナウ川の封鎖に使った長さ360メートル重さ16トンの『スレーマン大帝の鎖』（1529年）を引き出し、ドナウ川に200隻の舟を並べ、鉄鎖で繋ぎ、嵐をついて渡河し、撃破しました。『スレーマン大帝の鎖』はロングリンクチェーンだとすると、直径がφ42―44ミリくらいにもなります。どんな材料、どんな形状、その製造方法が私の興味を引きます。

②金角湾封鎖の鎖

46号の『ピレウスの港』（日刊産業新聞2016年7月4日付）の末尾に書いたコンスタンティノープル（ビザンティン）の陥落（1453年）の状況がイスタンブール軍事博物館に展示されている事を知りました。特に注目したのは金閣湾封鎖に用いられた鎖のことです（画像②④参照）。また、艦船を反対の山から、金角湾に下ろす作戦がジオラマにあります。メフメトII世は夜の内にボスフォラス海峡に船を集めてガラタ地区の城壁よりさらに外側のエリアから船を陸に乗り上げ牛に引かせ、一気に金角湾に突入しました。山越えには油を塗り敷き詰めた丸太の上を滑らせる様に船を運びました。『コンスタンティノープルの陥落』（画像③）という小説の中に、

③コンスタンティノープルの陥落

金角湾の鉄鎖敷設が以下の様に書かれていました。

――ニコロは、（中略）金角湾のコンスタンティノープル側の岸壁に立ち、今しも岸を離れた二隻の小舟が、ゆっくりとした動きで対岸に向うのを眺めていた。擢（かい）の動きもリズミカルに並行して進む二隻の小舟の船尾には、一本の丸太がわたされている。その丸太には、大の男の二の腕ほどもある太さの鉄の棒で編まれた鎖が結ばれているのだ。巨大な鉄鎖のもう一方の端は、すでに、コンスタンティノープル側の城壁の塔の一つに附いている鉄輪に、丈夫な皮ひもを幾重にも編んだ綱で固定されていた。二隻の小舟の引く鉄鎖が対岸のガラタに立つ塔に結びつけられれば、金角湾の封鎖が完成するのである。（後略）――。

金角湾周辺地図

戦争が起こると鎖は、強度・重量など、その特性を生かして攻撃用の舟橋の架橋や防御用の港湾封鎖などのために使われるのです。

【参考図書】
▽橋のなんでも小事典（土木学会関西支部、講談社1991年）
▽ホームページ『トルコ紀行』（https：／／turkey．euonymus．info／）
▽コンスタンティノープルの陥落（塩野七生著新潮文庫1991年）

画像はカラーと交換しています。

日刊産業新聞 17・3・6